まち

No.2 2014年 新春号

発　行　日：平成26年1月18日
発　　行：日本大学理工学部まちづくり工学科教室
☎03-3259-0531（学科事務室）
発行責任者：横内憲久（教室主任）
編 集 担 当：阿部貴弘
制　　作：株式会社 ムーンドッグ

contents

巻頭言 …… 1
教室の動き …… 2
学生の活動 …… 4
まちづくりニュース …… 5
教員の活動 …… 6
コラム〈私とまち〉 …… 8

巻頭言

20XX年まちづくり工学科同窓会にて

教授　天野 光一

数十年たったまちづくり工学科の同窓会の会話を想像してみました。

A君　みんな、お久しぶり。では一年ちょっとの再会を祝して乾杯。まず、近況報告から。僕からでよいかな。みんなも知っているように僕はまちづくりワークショップで行った町に就職したんだ。そのまちに興味がわいたこともあるけれど、その時に知り合った商店連合会の会長の娘と結婚したのが最大の理由かな。地元の商店街ににぎわいを取り戻したくていろんなことをやっている。まず、商店街の人たちとワークショップをやっていろいろ知恵を出してもらったんだ。地区計画をかけて、商店のファサードを整えた。それと、子供が小学校に行ったこともあって時間ができたので、女房がおかみさん会をつくってさ、ワークショップで意見を出して、おかみさん会発案の、ちょっとおしゃれな売り物、飾り付けをボランティアでやったんだ。そうしたら、地元で顔の見えるおかみさんたちの頑張りということもあって、地元の人たちが郊外の大きなスーパーから商店街にかなり帰ってきたんだ。僕が町に入ったころはさみしい商店街だったんだけど、最近はかなり人が歩いている。

B君　僕は区の事業として小広場整備事業なんてものをでっちあげてさ、その事業で小さいたまり場をつくった。一軒商店が閉めたので、土地を借地してさ、まちかど広場をつくったんだ。あまり予算がなかったので設計はF君の設計事務所に格安でお願いして、施工は親父の建設会社に儲け度外視でやって貰ったんだ。商店街の中の小さな広場だけど、結構老若男女が集まっている。区民管理の掲示板をつくって、これが意外にきちんと管理されているんだけど、情報交換の場になっていて、自分としては現代版井戸端会議の場を作れたと自負している。

Cさん　私は市内のバリアフリー計画や整備をやっていたんだけど、もっとお年寄りを歩かそうと思って、まず息子の友達のおじいちゃんおばあちゃんたちと話をしたんだ。とくにリタイアした後のおじいちゃんたちは私が女性であることもあって喜んで参加してくれた。それで、まち歩きのグループを作ったんだけど、名前は「まちあるきプラチナ隊」。パクリなんだけど、シルバーより高級で良いかと思って、みんなどう思う？　私も時々付き合っているんだけど、まち歩きをしながら街路樹や草花の手入れをしたり、ゴミを拾ったり、通学している子供たちに声をかけたりして、結構楽しそうにやっている。平日中心に週1、2度2時間程度なんだけど、子供と会話もでき、まちもきれいになり、歩くこともあって、お年寄りが健康になって、やたら元気。

Dさん　わたしは観光系のコンサルタントにいて、観光まちづくりの仕事をしている。その関係で、仲間から情報を集めて、産休明けの私でも子連れで参加できそうなまち歩きのツアーを作ったんだ。地方の町の味を地元の人と一緒に楽しみ、その人たちと世間話をし、特段名勝でもない景色を楽しむというツアーなんだけど結構売れている。A君の町にも行かせてもらったよね。ただ、ツアー商品としては面倒な割に儲からないし、結構気に入って、旅行会社を通さずにリピーターになっちゃう人もいるんだ。観光まちづくりとしてはOKなんだけど、会社としては若干問題。

E君　僕は県にいるんだけど、市町の先輩後輩に連絡をとって、市町連携型の広域地域計画を立てたんだ。国にも通して、地域に還元できる計画になったと思っている。同窓の仲間って大事だよね。

F君　僕は一度公園・緑地系のコンサルタントに就職して、数年前に小さなコンサルタントを作って独立したんだ。儲かってないけど一応社長だぞ。まち科の同窓生、昔のネットワークを活かして、緑道とか水辺だとか広場とかの設計をやっている。B君の言っていた広場も設計したんだけど、あれは

ほとんどボランティアに近かったね。

B君　ごめん、ごめん。

G君　僕は規模の大きい建設コンサルタントにいるんだ。大きいということも良いこともあるぜ。Cさんの市の景観計画を別の部署にいる先輩のHさんがやっていてさ、その関係で、大きくはないけどまちにとっては重要な橋の設計を僕のいる部署が関わることになったんだ。美しくしなければ、CさんもHさんも納得しないし、計画に関係したまち科のA先生にも怒られそうだし、といってコストは抑えなきゃいけないし、もう大変。面白いけどね。

でも、大学時代に習った科目って今勉強しなおしながら仕事をしているけど、ノートや教科書を見ると思い出すし、結構役に立っているね。

一同　そうそう。

こんな会話が交わされる同窓会ができることを願っています。その時代にはリタイアしている私も誘ってくれるかな。であれば、ぜひ参加したいものです。

教室の動き

開設シンポジウム

准教授　仲村 成貴

2013年6月29日（土）、理工学部駿河台キャンパス1号館CSTホールにて、まちづくり工学科開設記念シンポジウム『新たな“まちづくり”を考える』が開催されました。梅雨の季節ではありましたが、まちづくり工学科の門出を祝うかのように見事な好天に恵まれ、251名の方々にご来場いただきました。

シンポジウムは天野光一教授の司会で進められ、冒頭に横内憲久教室主任、滝戸俊夫学部長より挨拶があり、官・民・学の第一人者である4名の方々からのご講演と続きました。ご講演いただいた上田清司氏（埼玉県知事）、和泉洋人氏（内閣総理大臣補佐官／前・内閣官房地域活性化統合事務局長）、八甫谷邦明氏（季刊まちづくり編集長）、中村良夫氏（東京工業大学名誉教授）から、豊富なご経験を交えて、これからのまちづくりや、まちづくり工学科に対しての期待などをそれぞれに語っていただきました。満席の会場は熱気に包まれ、大盛況の後に閉会しました。また、シンポジウム終了後に開催された懇親会にも多くの方々にご参加いただき、まちづくり工学科への期待が寄せられました。

講演を聴講した1年生からは「まちづくりに貢献したいという気持ちがより一層強くなった」「新しい学科に対する期待を感じた。頑張りたい」などといった声が多くありました。

横内主任より指示を受けてから開催までの約2ヵ月半の間、多くの方々にご協力いただきながら準備を進め、無事にシンポジウムを終えられたことに安堵しつつも、まちづくりを担う質の高い人材を輩出できるよう、教員としてより一層指導に励まなければと改めて決意した次第です。

大盛況だった広報行事2013

准教授　岡田 智秀（学科広報主査）

本学理工学部が毎年開催する一連の広報行事が、今年も無事にすべて終了しました。この行事は4種類あり、毎年実施されます。いずれも、対象者は主に中・高校生とその保護者です。

第1弾は、梅雨を目前に控えた湿度の高い時期に行われる6月上旬の付属生向け「オープンカレッジ」（今年は6月1日開催）、次いで7月上旬の一般高校生向け「入試フォーラム」（7月14日開催）があり、ともに駿河台校舎で実施されます。この2行事の今年の当学科方針は、「まちづくり」を高校生にも具体的にイメージしてもらえるよう、御茶ノ水周辺地区の大型模型や、東日本大震災の被災地復興支援で実際に使用している実践版まちづくり模型等を展示し、それらを活用して、まちづくりの意義や魅力について解説しました。

8月は第1週の土～日を使った、高校生全般向けの一大イベント「オープンキャンパス」があります。当学科では、教育カリキュラムを特徴づける4つの系列（総合系、景観学系、観光学系、福祉学系）を具体的に理解してもらうことを基本方針として、それぞれの展示ブースを設けて、各系列の教員たちが直接に来場者と向き合って、各々

各系列ブースで当学科の学びの魅力や社会的意義を解説

来場者と教員・在学生で熱気あふれるまち科ブース

の学びの魅力や社会的意義について丁寧な解説を繰り広げました。

最後は11月の第１週にかかる理工学部祭と同時開催する「キャンパスウオッチング」です。これは入試直前ということもあり、面接対策や入試種別の選択方法など、かなり具体的な相談に対応する点が特徴になります。

これらの行事では、学科の特色を講義形式で学ぶ「ミニ講義」も設置されますが、いずれの講義も大好評で予想以上の来場がありました。また、今回の各行事で、当学科１年生（１期生）の在学生有志の皆さんに会場のガイド役を務めていただいたことも、高校生にたいへん良い印象を与えたようです。

以上に関する今年の当学科実績は、６月行事492人、７月行事484人、８月行事（２日間）972人、11月行事56人の来場者数でした。ご協力いただいた学科教職員をはじめ、１期生有志の皆さん、また当学科教員の研究室から参加してくれた、まち科サポート学生の皆さんに厚く御礼申し上げます。

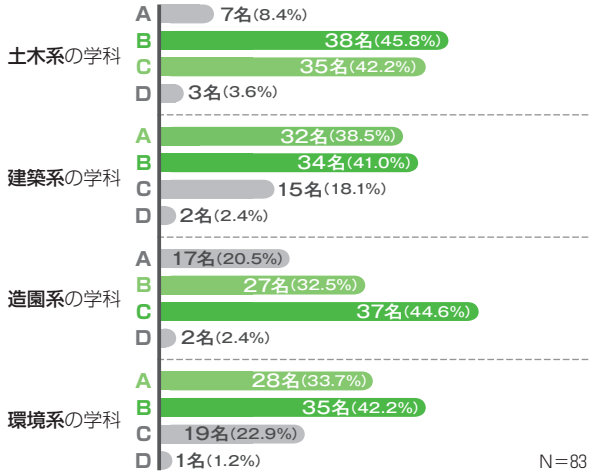
現１年生（１期生）から来場者に向けた歓迎メッセージ

まちづくり工学科１年生アンケート集計結果について

まちづくり工学科では、今後の学習、広報、就職活動、資格取得等のさまざまな場面に活かしていくために、毎年１年生を対象に継続的にアンケート調査を実施していくこととしました。今回は、その集計結果の一部をご報告しますのでご覧ください。

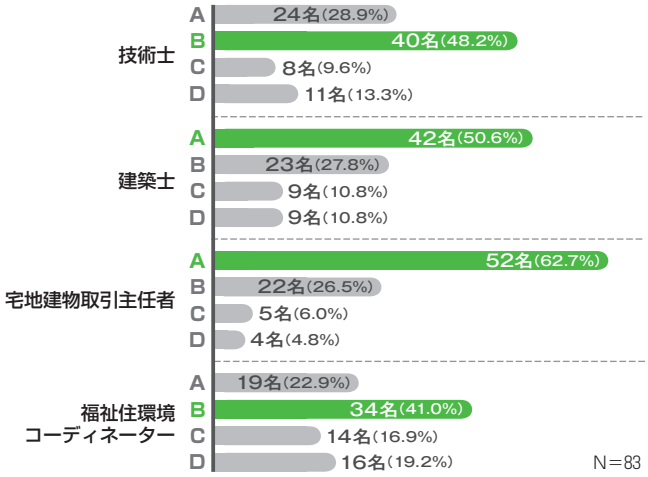
Q1 まちづくり工学科を選択する際、ほかにどのような学科に関心がありましたか？

A：強い関心があった　B：やや関心があった　C：関心はなかった　D：回答なし



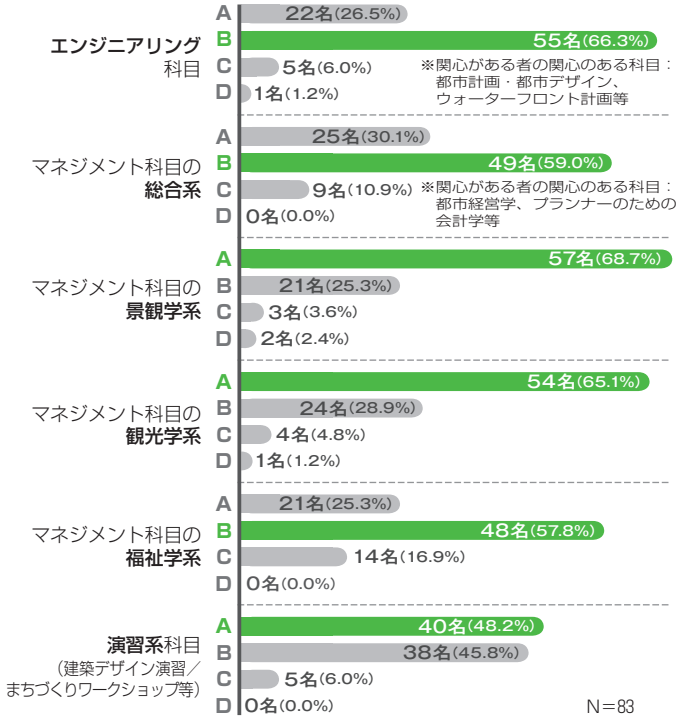
Q2 まちづくり工学科が推奨している資格について、自分自身で取得したいと思っているかどうかを教えてください。

A：ぜひ取得したい　B：関心があるが、取得するかどうかは検討中
C：関心がない　D：まだわからない



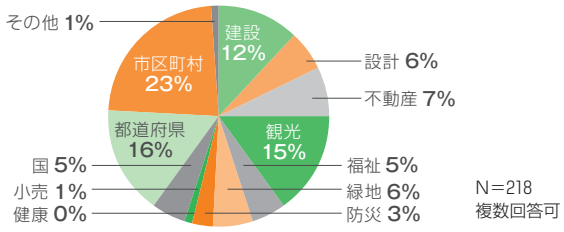
Q3 まちづくり工学科で学ぶ各分野への自分自身の関心について教えてください。

A：関心がある　B：どちらともいえない　C：関心がない　D：回答なし



Q4 現時点で、あなたが関心を持っている就職分野について３つ挙げ、最も関心のある分野には“1”、２番目に関心のある分野には“2”、３番目に関心のある分野には“3”を（ ）内に記してください。

順不同で関心を持っている就職分野３つを集計したもの



お茶の水アートピクニックへの参加

准教授　川島 和彦

2013年10月12日・13日の２日間、御茶ノ水駅前のお茶の水茗渓通りを中心に「第10回お茶の水アートピクニック」が開催されました。このイベントは、当地域のまちづくりビジョンのさまざまな計画の１つとして、文化・芸術を核とし、多くの人々が集い、ふれあえる場を提供し、心豊かな生活が送れるまち、文化・芸術のエネルギーあふれるわくわくする都市空間を提案するというねらいで、10年前から実施されてきたものです。

主催者から、まちづくり工学科が開設されたことをきっかけに、今後何らかの協力をしてほしいとの要請があり、１年生の建築デザイン演習の作品である「自分の住むまち」の模型とプレゼンテーションボードを展示することとなりました。

「まちの模型を作ることは人生初めて」という学生がほとんどであり、展示できるようなものが提出されるのかなど不安も多く、依頼のあった段階では「実施できるかは作品次第」というあいまいな回答をせざるを得ませんでした。しかし、学生自身のイベントまでの努力により、何とか在学生の約半数の作品を展示することができました。来場者には好評だったようで、他大学の学生からは「１年生とは思えない」「表現力がすばらしいものがある」などの声もあったようです。また、当日実施されていた本学 AO 入試の受験生たちも受験後に会場に立ち寄りました。まちづくり工学科を PR するいい機会となりました。

来年以降は、このようなイベントに関心のある学生たちが主体的に何らかの企画をするところから「地元」のお茶の水に貢献してほしいと思います。

まちづくり工学科 まち歩き「東海道 品川宿を歩く」

准教授　阿部 貴弘

2013年８月９日（金）に、まちづくり工学科の１年生を対象とした「まち歩き」を実施しました。

まちづくりの第一歩は、まず、“まち”を詳しく知ることです。そのための最良の手段の１つが、まちをじっくりと観察しながら歩き、さまざまな発見や情報収集を行う「まち歩き」です。

今回は、江戸五街道の１つである東海道の第一の宿場として繁栄した品川宿とその周辺を歩きました。教員４名の引率のもと、学生11名が参加し、JR 品川駅前の大規模再開発プロジェクト 品川インターシティに始まり、宿場の歴史と伝統を受け継ぐ商店街や寺院群、江戸の海岸線の名残を残す品川浦と御殿山下台場跡、運河沿いの倉庫を改装したレストラン T. Y. Harbor Brewery、そして高層ビルの林立する天王洲アイルと、江戸時代から現代に至るまで、新旧の魅力が積層する品川のまちを見て歩きました。気温35度を超える猛暑の中、約２時間の行程でしたが、みな最後まで熱心に「まち歩き」に取組みました。

今後も、機会をとらえて、学生のまち歩き技術を磨く場を設けていきます。

公務員講座

教授　高村 義晴

大都市、地方を問わず、時代の大きな変化のなかで、これまでのやり方や方法が壁に突き当たり、「新たなまちづくり」が必要とされています。それらの主要な担い手となる行政や新しい公共領域の場に、柔軟で創造的な発想をもち果敢な行動力をもつ人材を送り出していくことが切望されます。まちづくり工学科では、このような人材を育成し輩出することを目的として、独自の「公務員養成プログラム」に取り組んでいます。当プログラムは、「新たなまちづくり」を主動する公務員としての能力を準備する「①次の公務員人材プログラム」と、「②公務員試験対策プログラム」の２つのプログラムにより構成されます。

まちづくり NEWS

次のまちづくり

教授　高村 義晴

被災地での話である。商店街をつくる計画があり、盛んに議論される。商店街の魅力づくりが熱く語られる。けれど高台への集団移転が進められ、周囲の人たちが減る。他所への住民流出も止まらない。そんななか、商店街に来る顧客は、どこから来るのか。その人たちは、商店街が潤うだけの買い物をしてくれるのか。これらについては、避けるようにして誰も触れようとしない。

商店街は、商店通りという器に美装化を施しても、まちとしての生気はつくりだせない。商業という生業の事業性、成長性、持続性が必要とされる。これらを考えずに、受け皿をつくり商店を並べても、生業や仕事は続かない。結局、描いた餅にしかならない。

右肩上がりの時代は、つくり手にとってまさに幸運な時代であった。長く、国・地方でまちづくりの実践の現場に身を置きつくづくそう思えてならない。旺盛なニーズを背景に、少々粗があろうが、受け皿をつくりさえすれば、喝采をもって受け入れられた。けれど成熟し停滞気味の社会ではそうはいかない。加えて、そこに仕事や生業、暮らしそして地域の楽しみを見つめ、手を打っていかなければならない。

都市や地域は、これまでの「右肩上がり」「成長」の社会から、「安定・停滞・縮小」への傾斜を帯びる。いきおい、まちづくりは、いくつかの新たな考え方を導入せざるを得ない。それが“次のまちづくり”の姿を形づくる。第一に、暮らし、地域コミュニティ、生業・地域経済という側面を内包せざるを得ず、“都市なり地域経営”という考え方が求められる。第二に、総力や諸分野等を結集せざるを得ず、“新たな総合マネジメント”や“仕組み・仕掛け”というものが必要となってくる。第三に、これまでの需要対応から、「需要創出」「顧客創造」に転換を迫られ、“付加価値の創造”という視点が欠かせなくなってこよう。そしてそこに、まちづくり工学科の使命と出番があるように思えて仕方ない。

▲暮らし・生業の復興まちづくり

▲新たな都市の楽しみ

ゴルフの聖地を甦らせたフットパス（理工学部海外研修報告）

助教　押田 佳子

2013年８月９日から31日までの３週間、理工学部海外研修でイギリスを訪れ、各地で「フットパス」を調査した内容についてご報告いたします。

１．イギリスにおけるフットパス

近年、日本各地で進められているフットパス整備とは、旧来使用されてきた里道や作業道・遊歩道などを散策路として再整備するものであり、観光振興のみならず、整備プロセスを通じて地域の魅力と課題を抽出するまちづくりのツールとしての期待が高まっています。

本来、フットパスとは、イングランドにおける「人々が土地所有に関係に無く歩く権利（通行権：Rights of Way）」を有する道です。フットパスのあり方はイングランド・ウェールズとスコットランドで違いはあるものの、基本的には地域住民の散策のためのものであり、長距離に及ぶものやスポンサーシップにより整備されたものは観光客向けに公開されています。現地において興味深い事例を数多く調査しましたが、今回は観光まちづくりのために整備されたセント・アンドルーズの事例をご紹介します。

２．ゴルフの聖地で進められた観光まちづくり

セント・アンドルーズは、「ゴルフの聖地」としてあまりにも有名なまちです。その概況がスコットランドの東海岸に位置し、人口17,000人弱の小さな港町であることは意外に知られていません。

宗教改革等の影響で19世紀末まで荒廃していたセント・アンドルーズを一躍有名にしたのは、1969年に世界屈指のゴルフクラブ Royal and Ancient Golf Club of St Andrews（以下、R&A）がスポンサーとなって実施した観光施策です。R&A は「世界最古のゴルフ場・オールドコース」に加え、豊かな海の自然や中世から続く歴史的なまちなみを観光まちづくりのツールとして積極的に活用すべく、以下の２つのフットパス整備を行いました。

「Links and West Sands」は全長7.25km、２～2.5時間で歩く初級向けコースで、オールドコースのクラブハウス前をスタート後、１番ホールを左に見ながら砂浜に出て北上、その後再び内陸に向かい、再びオールドコース沿いに歩いてスタート地点に戻る―つまり、最後は18番から１番ホールまでを横切る直線で締めくくられます（地図１）。この直線は驚くべきことに、プレーの邪魔さえしなければ車も通過することができ、世界屈指の名門コースとは思えない大らかさがありました（写真１）。また、このフットパスは歩いて楽しむだけでなく、その脇に設えられたベンチや近隣のパブからプレーを見学、時にはプレイヤーに賛辞を贈る場でもあり、ゴルフとともにあるまちの姿が垣間見れました（写真２）。

「Town and Gown walk」は全長５km、1.5～２時間で歩く初級向けコースであり、オールドコースのクラブハウス裏の広場をスタートした後、スコットランド最古の大学であるセント・アンドルーズ大学、セント・アンドルーズ城、大聖堂など、歴史巡りに重きを置いた設定となっています（地図２）。海沿いのフットパスには、視点場となるベンチや来歴を記したサインなどが整備され、コース全体を通して港町の風景を堪能できる設えとなっていました（写真３）。

これら２つのフットパスでは、R&A の支援のもと、セント・アンドルーズ大学の学生有志がガイドを務め独自のパンフレットを作成して季節のイベントを紹介したり、隠れた名所やオススメの風景を巡らせるような仕掛けづくりに取り組んでいます。さらに８月下旬以降の紅葉シーズンには、学生たちの独自企画としてツタの紅が映えるキャン

地図１

地図２

写真１

写真２

写真３

地図１ Links and West Sands
地図２ Town and Gown walk
写真１ オールドコースを横切るように設定されたフットパスの直線部
写真２ 近隣のパブから歓声を送る観光客
写真３ 観光資源の来歴を示すサイン
※地図１、２は「Walkhighlands Map：St. Andrews」に筆者が情報を加筆したものです。

パスツアーが開催され、好評を得ていました。このように人口の少ないセント・アンドルーズでは、大学生たちも観光まちづくりの担い手として活躍しており、世代を替えながら20年以上も継続されています。

以上に述べたフットパス整備やそれにかかわる取り組みによって、かつて荒廃していたまち並みは「スコットランドで最も美しく豊かなまち」と評されるまでとなりましたが、今後もさらなる観光まちづくりの展開を図るべく、R&Aと大学生、市民たちの間で日々協議が重ねられているのです。

3.「歩く」観光まちづくりの可能性

セント・アンドルーズに限らず、訪れたまちのインフォメーションセンターや書店では、フットパスの案内書が数多くあり、イギリスにおける徒歩観光需要の高さがうかがえました。これについて、スコットランドのフットパスを統括するThe Scotwaysの担当者に尋ねると、「イギリス人は歩くことに貪欲」であり、彼らの考える観光とは「足」で歴史や文化を「知る」ことにあると述べていました。

日本にイギリスのフットパスシステムそのものを導入することは、土地所有形態の違いなどより現実的とはいえませんが、行政と地域住民、まちづくりプランナー、大学生といったさまざまな眼と足で検証したフットパス整備を進めることで、地方の小都市をセント・アンドルーズのような魅力的なまちにすることも夢ではないかもしれません。

平成25年度まちづくり工学科教員　受賞等のご報告

教授 天野 光一

平成25年度　富士宮市市政功労賞を受賞

富士宮市（静岡県）の景観審議会会長として、長年にわたり市および地域の振興に寄与したとして表彰されました。

教授 八藤後 猛

平成25年9月30日（月）NHK総合『あさイチ（生放送）』に出演
メインテーマ「ベビーカーのお出かけ　ひと言あり！」

子どもを含む多くの人々の公共交通、公共建築物の利用に関して、さらにバリアフリーと安全計画、ならびに利用マナーを含む社会的合意に関して、福祉まちづくりの立場から発言しました。

『福祉のまちづくりの検証　その現状と明日への提案』が発刊

本書は、日本福祉のまちづくり学会（副学会長：八藤後教授）の15周年記念として企画されました。近代における福祉のまちづくりの系譜と２つの大震災を踏まえた福祉のまちづくりの道程を評価し、今後のまちづくりへの提言を行っています。本書は、彰国社から平成25年10月30日に発刊されました。

准教授 岡田 智秀

岡田准教授がテレビ、ラジオ番組等に出演

岡田准教授がテレビやラジオ番組に出演したほか、新聞においてはコメントなどが多数紹介されました。

- **４月８日（月）TBS放送**「報道の魂～スペシャル　3・11大震災２年 記者たちの眼差し」
  Episode14. 巨大防潮堤編；安全と暮らしやすさを両立させる津波避難山「命山」
- **５月28日（火）FMいわき出演**
  「地元小学生と大学生による四倉ふるさと発見まち歩きの紹介」
- **７月１日（月）財団法人日本自然保護協会インタビュー**
  「防潮堤に頼らない海岸地域のまちづくり」
- **７月８日（月）いわき民報掲載**
  「子供目線で四倉発見～四倉ふるさとづくりワークショップでまち歩き＆防災マップ作製～」
- **７月８日（月）NHK福島出演**
  「四倉小児童と大学生による四倉ふるさとづくりワークショップ開催」
- **９月11日（水）読売新聞朝刊掲載**
  「世界遺産三保の松原の保全工法決まらず（コメント紹介）」

准教授 後藤 浩

平成24年度 河川整備基金助成事業優秀成果として選出・表彰
研究テーマ「東日本津波に対する海岸防備林の防災機能に関する調査研究」

青森県八戸市～宮城県亘理郡山元町の広範囲な沿岸領域を調査対象として現地調査を実施し、東北地方太平洋沿岸の海岸保安林の東日本大震災に伴う津波に対する防備効果を明らかにしたものです。河川整備基金345件応募のうち145件が採択、そのうち27研究が優秀成果に選ばれ、その中の１つが本研究テーマです。

准教授 阿部 貴弘

平成25年度 土木学会土木史研究発表会において優秀講演賞を受賞
論文名「城下町小幡の雄川堰の形成と変遷に関する研究」

平成25年６月22日（土）・23日（日）に東北大学で開催された第33回土木史研究発表会において、研究成果をわかりやすく豊かな表現方法で発表を行ったとして、表彰されました。

助手 西山 孝樹

平成24年度 土木学会論文奨励賞を受賞
論文名「紀の川上・中流域における近世中期以前の灌漑水利の変遷に関する研究」

36歳未満の若手研究者が、土木学会論文集等に発表した論文のなかで主要な役割をなし、これが土木工学における学術・技術の発展に寄与して独創性と将来性に富むものであると認められ、表彰されました。

column〈私とまち〉

「まち」にあふれる個性に触れる

准教授
後藤 浩

私の生まれは柏市、育ちは八千代市である。大学院修了後、大学に奉職し、一人暮らし最初の地として、足立区綾瀬を選んだ。その後、墨田区江東橋（錦糸町）にも暮らしたことがある。これらのまちも面白かった。そして、現在、最寄り駅を品川駅とした場所に住んでいる。品川駅は、山手線内での乗降客数５位（2012年度）で新幹線も乗り入れる大きな駅である（写真１）。駅周辺地域には、近代的なビル群を有するインターシティ・グランドコモンズや世界最先端企業のソニーの本社があったり、近くには旧東海道が走り下町の街並みを呈し、さらに目黒川旧河口である品川浦（写真２）には屋形船などが多数停泊するなどの昔ながらの風情も備えたりしている異種混合の興味深い地域である。

このような面白い品川駅周辺地域であるが、今回はあまり知られていないと思われる場所を紹介する。JR 品川駅を降り東西通路（レインボーロード）を歩き港南口へ向かうと駅前広場が眼前に広がる（写真３）。見渡せば、広場周辺の奥には、たくさんの飲食店が並んでいる（品川駅港南商店街という）。一見何ら変哲のない風景であるが、よく見ると、街区の中へ入れそうな小道が見える（写真３○印）。小道を入ると人一人が通れる程度の道が迷路みたいに走りまさに「裏路地」を形成している。そこには、いずれも小さな店構えの焼肉屋（ホルモンも含む）、居酒屋などの飲食店が多数存在している（写真４）。その中でも、焼肉屋が多い。詳しい理由はよくわからないが、この近くに、東京都中央卸売市場食肉市場が存在しているのが背景にあると考えられる。この地に食肉市場が立地する背景は、食肉市場の HP によれば、横浜の中川屋嘉兵衛という人が、荏原郡白金村（現在の芝白金）に東京で最初の「屠場」を開設したことが由来とされている。このような風情あふれる「裏路地」の存在は、ドライなビジネス空間が広がる品川駅前ににぎわいを呼んでいる（人は人と、雰囲気の良い場所で話すことによってアイデアも膨らむ。日々思考を重ねるビジネスマンにはオアシスである）。この裏路地は、品川という「まち」の無形の財産で品川駅前のまちづくりの重要なコンテンツであると考える。

このように、「まち」は人と同じで個性がある。個性を掘り起こし、型にはまった答えのない「まち」に息吹を与える技術を学生たちには、ぜひ学んでいってもらいたい。

▲写真１

◀写真２

▲写真３

▼写真４

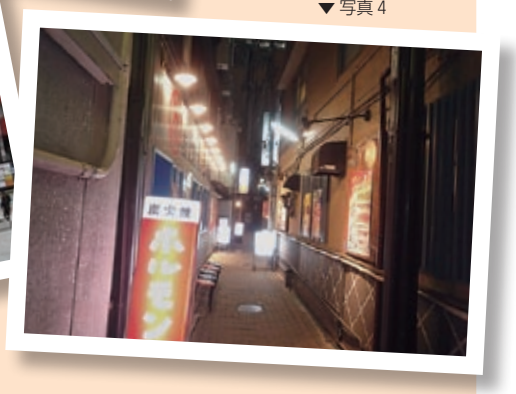


写真１　港南口から見た JR 品川駅
写真２　屋形船や釣り船が停泊する旧目黒川河口の品川浦
写真３　品川駅港南口広場と街区内部への小道
写真４　夜の街区内部の飲食店街

編集後記　まちづくり工学科が誕生して、まもなく１年が経ちます。第１期生のまさにフレッシュマンたちが、教員と一緒になって、新しい学科を引っ張ってくれました。今号では、学生や教員の活動を中心に、フレッシュな学科の１年の様子をお伝えしました。（貴）